

に向って決意し、過ぎ去った「時間」(過去)を反省しつつ、自己確認をすることをある。しかし、その場合でも、物理的に「空間化」された「時間」(長い時間、短い時間、long long agoなどがそうである)でものを考えている。「時間」次元での自己確認は、個人的には、出生の由来の確認であったり、死への先駆的決意であったり、集団的には歴史意識の自覚であったり、世代的自覚(世代論で言う)であったりする。いずれにしても、「時間」の場合の自己確認は意識的なもの、いや、観念的なものでさえある。これに対して、「空間」における自己確認は直截であり、感覚的でさえある。目を明ければ「空間」がわれわれを包み、目を閉ざしても音が「空間」を示してくれる。これを要するに、人はまず「空間」的イメージで自己確認を求め、自己のアイデンティティ

を求めようとする、といっている。そして、この「空間」的イメージのアナロジーで社会的現象、文化的現象を語る。

以上は、これから本格的に立論する予定の社会史、文化史のなかの「空間論」の予備的考察である。並列的に述べてはきたが、これらの中で、今後ますます肥大化してこうとしているのは、コンピューター、インターネットの中の「空間論」、あるいは「ヴァーチャル・リアリティ」の中の「空間論」であるのは言うまでもない。ただし、これらの問題は、目下、技術の問題を主たる関心としている。技術の問題を主たる関心とし、副次的に他の「空間」をそれにすべり込ませているというのが、実情のようである。この二つの傾向が、今後乖離してくるのか、それともコンフリクトを引き起すのか、今のところは予測つきかねる。

て「ポスト・モダン論」(F・リオタールによって口火を切られた)の旋風が吹き荒れた。もともとこの「ポスト・モダン論」は、建築論(C・ジェンクスが最初の問題提起者)が先鞭をつけていたものであったので、当然にも「空間論」が含まれていてしかるべきであった。しかし、思想論争としての「ポスト・モダン論争」は現代社会の構造把握が中心となり、社会史、文化史上の「空間論」にまでは立ち到らなかつた。しかし、八〇年代末にいたって、ポスト・モダン論者の「空間論」「風景論」がようやくして登場してきた。在日フランス人、オギュスタン・ベルクの諸論作である。彼の研究には、比較文化の視角から、西欧近代絵画のみならず、中国、日本の伝統絵画についての研究も含まれているので、日本での評価、論評がもつとなされてしかるべきかと思う。小冊子ながら、優れた彼の著作の一つ「日本の風景・西欧の景観」(一九九〇年)の内容と問題を少しく考えてみよう。

西欧絵画史上、遠近法を基とする「風景画」はルネッサンス期に登場する。この「風景画」は視る視点、つまり近代的自我の登場の所産でもあった。ここまでは、おおかたの美術史家が述べている。しかし、おおかたの美術史家は、西欧的遠近法は日本の伝統絵画にはなく、ようやく導入されたのは江戸の中期以降であるという。これも間違いではない。

しかし、西欧絵画史上における「風景画」の研究は、ようやく二〇世紀に入ってからのことである。この時期、西欧では「モダン論」が最後の華を咲かせていた。その後、近代的自我論は解体に向かう。とすれば、近代的自我が絶対的の視点ではないことになる。また、近代的な不動の自我を主体として、対象(客体)を描く「風景」も絵画の不動の原理であるわけではない。主体の解体化は、主体とよばれていたもの自体を客観的に考察することをうながす。とすれば、一枚岩と思われていた主体に様々な差異性をもった視点をもったものが立ち現われてくるはずである。

二〇世紀西欧絵画はセザンヌ(勿論、彼は十九世紀末であつて二〇世紀

ではないが)に始まり、未来派にいたる様々な試みの中で様々な視点を模索してきた。ひるがえって、日本の伝統絵画を顧みるなら、このような試みは「山水画」「水墨画」の中にあつたではないか。あれらは確実に遠近法で描かれていた。しかし、西欧近代的な意味での遠近法ではない。日本の「山水画」「水墨画」は様々な差異性をもった視点で描がられている。では、ポスト・モダンの時代の絵画、風景、総じて言うなら「空間」設定はどうあるべきなのか。それは、西欧において近代の主・客二元論的「風景」の危機から生れたポスト二元論と、東アジアの伝統である非二元論とがどのような形で融合しうるかにかかっているだろう。

以上がベルクの思想の骨子である。室町時代の「水墨画」がポスト・モダンの源流などと言われると、いささか戸惑いを感じざるをえないが、彼の思想が確実にポスト・モダンの「空間論」「風景論」であることには間違いはない。ただ、時代はもう一つ転換して、「ポスト・モダン論争」の時代から「ヴァーチャル・リアリティー論争」の時代へと転換した今、彼の議論がどこまで現実性を獲得しうるかが問題であるだろう。

暫定的まとめ

さて、以上、昨今の様々な「空間論」を見てきた。それらの多くは、物理的「空間」、地理的「空間」を基本モデルにしてのアナロジー化された「空間」を語っている。「周辺」「辺境」「アジール」「コミュニティ」「拡散」「生きられる空間」「ポスト二元論的風景」など、すべてがそうである。では何故、人はアナロジー化された「空間」を語るのか。以上述べてきた、それぞれのアナロジー化された「空間」の成立事情を、もう一度考えてもらいたい。結局、あのような「空間」を語ることは、人が己れの「位置」を確認しようとする行為に他ならない。

確かに「時間」を生きるわれわれは、これから来る「時間」(未来)

存在の分析を行なおうとしたM・ハイデッガーは、あの「存在と時間」のなかでわずかな頁を「空間論」に割いている。ハイデッガーは言う。われわれ人間にとっての空間は、幾何学的距離によって計られるものではない。「手許存在」^{ツッパハンデンザイン}によって計られる空間というものもある。

例えば、昨日の屋根の修理の際に、三m上の屋根の上にはばらばらに置き忘れられたノコギリとハンマーよりも、一〇m先の物置小屋に整理して置かれたノコギリとハンマーの方がより近いのだ。とまあ、このような論理から、彼は、この世界の中に限定されて存在している人間存在のあり方の一つとしての「手許存在性」を分析して行く。ここは「現存在」のもつ「手許性」の是非を問う所ではない。大雑把な言い方をすれば、ハイデッガーの「手許存在」としての「空間論」は、確かに現象学的考察かも知れないが、実のところ、彼自身が嫌っている心理学的考察に近いものである。現に、物理的距離と心理的距離の違いの研究は、心理学の格好のテーマの一つになっている。つまり、ハイデッガーの「空間」分析は、彼自身も認めているように、あくまでも「時間」分析の副次的追求であり、それほど実りあるものとは言い難いということである。

ハイデッガーのあの著作が出版されて数年後、精神病理学の立場から「空間」を論じ、社会問題、文化事象への対応にも大きな示唆を与えた著作が出版された。E・ミンコフスキーの『生きられる時間』（一九三三年）である。表題の示す通り、ここでも追求テーマは「時間」であり、「空間」は副次的なテーマでしかない。それにしても、ミンコフスキーは精神科の専門医であり、それだけに、彼は「空間」とわれわれの精神状況について多くの異常例を報告、分析してみせ、示唆に富む考察を示してくれている。彼は、「時間」と同じく、「空間」にも「生きられる空間」というものがあるという。彼によると、平常の人は対象に対して、他者に対しても、「へだたり」と「結びつき」の両心理を持つて生きており、なおかつ、自分と、世界の出来事との関係は「偶然」によって結

びつけられているのだという感情をもって生きているのだ、というのである。「へだたり」は心理的遠さであり、「結びつき」は心理的近さである。「へだたり」だけの「空間」ならば、人は不信と無関係の中だけを生きることになるだろう。「結びつき」だけの「空間」ならば、インテリメイトな関係の中を生きることになるだろうが、これだけなら、人は息苦しくなるか、果ては精神に異常をきたすことにもなるだろう。ミンコフスキーによると、人は、この「へだたり」と「結びつき」の二つの心理をもちながら、偶発性の人間関係を生きているのが「生の広がり」「生きられる空間」なのだという。もしそうでなかったら。例えば、道行く人々のすべて（偶然の通行人を何らかの必然の結果ととり）が、私を陥いれるために歩いている（距離の凝縮、結びつき）のだとしたり、何か遠くの物音を、私に向かってささやく声だどとったり、極端な場合、私の耳許で私に命ずる声だどとったりすれば、それは明らかに分裂症の症状を呈していると言わざるをえないだろう。しかし、ミンコフスキーにとっても「生きられる空間」の積極的提示は困難であったようである。彼の手法は、豊富な分裂症患者の症例を紹介しながら、「生きられる空間」の消去法的提示にとどまっている。

現象学やら精神病理学における以上のような「空間論」が、例えばドイツ系のピンスワンガーなどを経て、戦後にどのように展開されて行くことになるのかは興味のある問題である。しかし、これから社会史、文化史上の「空間論」「風景論」を論ずるにあたって、基本的視角のそれぞれを提示することが目的の本論文では、そのことはテーマからはずれた問題となる。

⑤ 「ポスト・モダン論」の「空間論」

一九七〇年代末から八〇年代にかけて、フランスの思想界を中心にし

意味があったことになる。もつとも意味のある情報でも無理解のため受け手が受け取れない場合もある。こう考えてくれば情報の意味は主体の本質には依存しないことになる。そしてまた、情報の特質として、情報が伝播して行くにつれて、情報の価値は減じて行く。皆なに知れ渡った情報は、もはや情報ではなく、常識へと変貌しているからである。情報と貨幣とはよく比較されるものだが、情報と貨幣との違いはこの価値の減少にある。それはともあれ、価値を減じながらの情報の伝播を、人は、情報の「拡散」という「空間」的イメージで語ることが多い。

情報ハイウェイであれ、インターネットであれ、情報が社会的コミュニケーションで語られる場合の「空間」は、以上のごとくごくわずかでしかない。しかし、原則論ではなく、現実的に情報世界を考えてみよう。ここでは、今なお「中心と周辺」のテーマが生きている。確かにインターネットは水平的情報交換の世界ではある。だが、水平的情報交換の場合、その情報の信憑性は極めて低い。高い信憑性の情報を得なければ、人は権威あるニュース・ソースを求めるのが現実である。しかも、これまたグローバルに見るなら、政治、経済は言うに及ばず現代文化にいたるまでの情報発信源は、圧倒的にアメリカに偏在している。EUもイギリスも日本も残念ながらアメリカの発する情報に反応するしかすべがない。情報世界の現実も、格差化された「空間」の世界で動いているのが実情である。

他方、セルフ・コントロール技術とコンピュータ・グラフィック技術の合体は、遂にヴァーチャル・リアリティーの世界を生み出した。一九七〇年代初頭、現実の世界をいかにシミュレートした世界を作りあげるかに腐心していた時代と比べると、隔世の感がある。ヴァーチャル・リアリティーの世界は、どこにも無い「空間」、まさに人工の「空間」を生み出したことを誇っている。どこにもない「空間」、どこにもない「風景」とは本当だろうか。しかし、デモンストレートされたそれらの

「空間」「風景」は、すべてリアルな現実世界の切り取りであり、模造以外の何ものでもない。考えてみればいい。リアルな「空間」「風景」(可想的「空間」まで含めてもいい)をまったく離れた人工的距離関係、方位関係などあるはずがない。

④ 感覚的「空間論」

このテーマで取りあげる題材、取りあげ方法はすべて第二次大戦以前のものである。したがって、本来なら戦前の考察の部で述べなければならなかったのであるが、これまで述べてきた様々な「空間論」との対比の必要上、ここにもってきた。

さて、われわれが「空間」という時、最も直截にイメージ化することができるのが、この「空間」である。つまり、感覚によって捉えられた物理的「空間」であり、幾何学的「空間」である。今、日常の「空間」を取り扱うつもりなので、「絶対空間」であるとか、非ユークリッド「空間」であるとかは扱わない。日常的物理的「空間」は、デカルト的な意味での距離(長さ)で計られる。と述べた瞬間に、私自身、近代的な「空間」を想定していることになる。西欧社会では「空間」観にも歴史的展開がある。それを承知の上で近代的な「空間」に話を限定する。ところで、「空間」は距離(長さ)によって計られると述べておいた。計るものは視覚である。視覚に障害があれば、聴覚である。聴覚は音の遠近によって「空間」を計る(それ以外の感覚については除外する)。計る主体は、身体性を備えた人間主体(あるいは動物個体でもいい)である。まずは、これが日常的「空間」を考察するにあたっての基本構図であらう。

このような「空間論」に対して、今世紀に入って更に別な「空間論」を提示したのが現象学であった。例えば、現象学的方法論によって人間

ティー（西欧史でならコミュニヌ）の中で生きている固有の慣習、習俗を大切にし、その上で他の文化圏の人々との対話を試みようという。

「対話的アイデンティティー」がこの派のスローガンになる。その代表者がケベック州選出の政府委員を勤めたことのあるC・テイラーである。

ここは、リベラル派とコミュニティー派のどちらが正当であるかを論ずるところではない。問題は、この論争が歴史性（時間性）をからめながら、地域性（空間性）の特殊性を主張しているところである。リベラル派の言う「近代的諸理念」が、地域性をすべて均質化して進展するものなのかどうか。これに対して、コミュニティー派は地域性を持ち出すことによって、結局のところ、自己のアイデンティティーを主張していることに注目して置きたい。前掲の「中心と周辺」論でもそうであったのだが、中心からの（政治的であれ、文化的であれ）距離を確めるといふ営みは、やはり、自己確認の営みでもあったのだ。「周辺」に固執するのであれ、「地域」に踏みとどまるのであれ、何がしか「空間」にまつわるイメージ、メタファーを持ち出す場合、その背後に常に人間の自己確認、自己のアイデンティティーを求めようとする希求が隠されている。

「近代的諸理念」を経済的側面から見ると、「資本」の論理ということであろう。「資本」の論理は文明化を伴ってあまねく世界を覆うという確信は、あの十八世紀末のイギリス啓蒙思想家群から、マルクスをも巻きこみ、昨今のグローバル経済主義者にまでおよんでいる。これに対して、「資本」の論理の弊害をチェックすべしと考える人々は、今のところ、チェックの機能をローカルな各国の政治権力（アメリカと言えどもローカルな政治権力であることに変りはない。）に依存せざるをえない。有効、無効は別として、これなどははつきり地理的「空間論」による対抗策である。更には、人間生活を重層的に「空間化」し、「資本」の論理の貫徹を許容しない「空間」の存在を主張する立場もある。例え

ば、ハーバーマスの「システム世界」と対比された「生活世界」論などがそれであろう。「システム世界」が「空間」性と無縁なのに対して、「生活世界」の方は、コミュニケーション的行為が貫徹する「場」のイメージが常につきまといっている。これらの対抗策もまた、生活することの意味を求める時、「公共」の場なり、「コミュニティー」の場なり、家庭という場なりの「場所」^{スラフエ}（つまり「空間性」のこと）に求めざるえないということである。

③ コンピューターの中の「空間論」

これは、もともと物理的「空間」や地理的「空間」を非空間化するための処置である。コンピューターに依るにせよ、パソコンに依るインターネットに依るにせよ、それらの目指すのはグローバル化である。それらのハードを通して情報は瞬時に世界をめぐり、物理的「空間」や地理的「空間」は無化されると言われている。確かに、このテーマほど、前二者と違って、自己確認やら自己のアイデンティティーなどといった問題と無縁なものはない。せいぜい問題となるのは、心理的主体やら行動の基本としての身体であろう。それは情報の本質に由来する。改めてあのN・ルーマンの所説によるまでもなく、情報理論で言う情報では、人間主体だの、人間の自己確認だのは問う必要がない。そこでは、情報の処理と受け手だけが問題となる。他と異なつた事態が発生（差異性が発生）し、これが一定のコードに乗るように変形され（これが意味化されるといふこと）、そのコードに従ってコミュニケーション・ルートに流される。一定のコードに乗るよう変形されないものはノイズにすぎないものとなる。こうして流された情報を、受け手が受け取るかどうかは別問題である。受け取る場合もあり、別様に受け取る場合もあり、また全然受け取らない場合もある。受け手がその情報を受け取れば、その情報には

るや、この論もまた地理的「空間論」から、社会的「空間論」へと移行し、米ソ両国の権力構成のあり方を問う問題へと展開していったものであった。ここで言う社会的「空間論」とは、例えば、同一都市内において、マイノリティーの居住空間がある一定の地域に限定され、マジョリティーとのたえざる緊張関係をはらんでいるような「空間」を言う。また、日本の論壇の一角を占めている「刃境論」「沖繩論」あるいは昨今なら「東北学」も、以上の「第三世界論」と類似の問題性を孕んでいると思われる。

② リベラル派とコミュニティー派の「空間論」

この論争は、「中心と周辺」論争と二部ダブル内容を含みながらも、まったく違うコンテキストから生れてきたものである。この論争は、むしろ「近代」の歴史的発展性（言うならば「時間論」）の地理的普遍性（この点で「空間論」と切りむすぶ）を問うことを主眼としている。その内容は次に述べる通りである。

一九九〇年代のグローバルな論争の一つに「異文化理解」「文化衝突」というテーマがある。このテーマのうちで国際的論争として有名になったのが「リベラル派 vs. コミュニティー派」論争である。この論争も、もともと「空間論」やら「風景論」でスタートしたものではないが、せじつめれば、地理的「空間論」に還元出来る内容を孕んでいるので、ここに取りあげる。この論争は、昨今のカルチュラル・スターデイズの格好のテスト・ケースとして取りあげられている。論争の地理的舞台はカナダである。周知の通り、カナダはイギリス系住民とフランス系住民とによって構成されている。その構成はイギリス系四〇%、フランス系二七%（一九八一年度統計）だそうである。しかし、その%はケベック州だけとると逆転する。両者の角逐は近代英仏植民史をそのまま反映し

ていると言っている。イギリスの圧倒的勝利のもと、カナダはイギリス連邦の枠内にとどまったため、ケベック州の多数派を占めるフランス系住民の不満は、かなり以前から強まっていた。度重なる憲法改正によって、カナダは「二言語、二文化」の国から、「二言語、多文化」の国（二文化では英仏系住民以外の住民から不満が出るからである。）への移行を明言する。現に、ケベック州のフランス系住民がイギリス系住民の支配に対する異議申したての正当性を訴える以上、同州のフランス系住民は内州内のインディアン、イヌイット等の先住民の異議申したての正当性を認めざるをえない事態に追いこまれている。（一九九九年、北部イヌイットの自治権承認）。十八世紀後半以来、ともに本格的近代社会の最先端を走ってきた英仏両言語系の住民にとってさえ、憲法上の名目的共存はともかくとしても、実質的な共存がかくも難かしいとなると、先住民系、アジア系、東欧系の住民との共存の困難さは思いやられるものがある。

このような事態に局面して、近代社会における共存である限り、法的、経済的、社会慣習的コンフリクトがあつたにしても、フランス革命によって定礎された「近代的諸理念」があまねくカナダ全領域に貫徹されるべきだと主張するのがリベラル派である。このリベラル派の主張には、「近代的諸理念」は歴史的発展の当然の帰結であり、カナダ全領域のみならずグローバルに妥当するものであるという確信がある。「近代的諸理念」とは、要するに人権思想を中心とした近代市民社会の基本的諸理念のことである。この派の代表的な思想家として、J・ハーバースをあげることが出来るだろう。これに対して、近代市民社会の諸理念の妥当性を認めないわけではないが、言語、文化、社会的慣習の固有性と差異性とを尊重すべきであり、現にケベック州には、それらの（特殊フランス的）文化が生きているという立場をとるのがコミュニティー派である。人々が生きて行くにあたって、抽象的普遍的理念よりも、コミュニ

るか。このようなテーマにおいて、勿論、前者の立場に立つて論を立てるということはある。特に、近代立憲国家成立以降は、歴史学的にも社会学的にも豊富な資料（史料）の残存する集権化された権力所在からの見方の方が、何かと文献操作の上では好都合であったということもある。しかし、権力の基盤という問題に本格的に踏み込めば、前者の立場に立つ論者であっても、周辺（地方、地域）に論及せざるをえない。

「中心と周辺」論は、もともと政治権力や文化的権威のあり方に対する批判的視座からスタートしたと述べておいた。とすれば、批判的視座が最も生きるのが後者の立場に立つ場合である。だが、後者の立場に立つ場合、困難は従来の文献操作的歴史学では処理し切れないということであろう。従来の方法で処理しうるのは、革命や大規模反乱といった資料（史料）がかなり残存しているケースに限られる。そこで、この立場の方法論は、文化人類学、民俗学、宗教学といった歴史学とは別な方法論に依らざるをえないことになる。これらの方法を駆使して、埋れた地方史料を発掘することであり、隠された民衆意識に光をあてることである。

そのような意味で、あのフランス革命史研究にその名をとどめたミシュレが、同時に「魔女」史料の集収家であったことは、あまりにも示唆的である。新しい方法と民衆史料の発掘は、リュシアン・フェーブルやマルク・ブロックらによって第二次大戦前に活動を開始せしめられ、戦後に大きく発展するフランス、アナル派（『アナル』誌発刊は一九二九年）に、その努力の跡を見ることが出来る。ドイツの場合は、社会学を中心とする社会科学的方法に力点がかかっているが、H・ローゼンベルクに始まり、今日、H・U・ヴェーラーらに代表される社会史学派もまた同じ思考性をもった学派である。日本では、かつて七〇年代に話題になった民衆史学派とよばれる人々がいる。鹿野政直氏や芳賀登氏といった人々である。これらの人々は、江戸期の百姓一揆の創意の追求、明治の自由

民権の憲法草案の発掘、大正期デモクラシー運動の聞き取り調査など、従来の歴史学のない知見を披瀝してみせてくれたものであった。

勿論、アナル派にしても、社会史学派あるいは民衆史学派にしても、「空間」や「風景」をテーマにしていたわけではない。しかし、権力を中心（あるいは中央）として「空間」的イメージで語り、権力機構（官庁群）あるいは文化的権威装置（有力寺院等）を「風景」として配置して語る限りでは、言うならば政治的「空間論」とでも言いうるものである。このような「空間論」は、多くの場合、物理的、地理的「空間」とも重なり合う。「周辺」は、中央からの政治的距離で語られるのは言うまでもないが、日本の場合、「サツマ」も「アヅマ」もともに「端」に由来する語であつたらしく、この場合なども、直截に政治的「空間」が物理的、地理的「空間」と重なり合っている。とは言え、政治的距離で計られる「空間」が、物理的、地理的距離と重ならない場合もありうる。王城の地のど真中にも「周辺」がありうるからである。中世期、京の下の世界、あるいは四条河原下の世界などは、さしずめ最周辺の世界（最周辺は聖性と一致する。この両側面を備えた世界をアジュールという）であつただろう。そしてまた、この最周辺の世界が王権を支える基礎をなしていたことは、昨今の中世史家が教示してくれているところである。これらの研究成果の一つは、文献史料だけなら、ややもすると固定化、実体化しがちな政治的「空間論」、文化的「空間論」を流動的、関係的なものに置き換えたということであろう。学的方法論をともなつた問題提起ではなかつたが、かつて冷戦体制が火花を散らしていた時、「第三世界論」が盛んに取沙汰されたことがあつた。これも言うならば、地理的「空間論」をベースにしての「周辺論」であり、この「周辺」からの二極構造に対する問題提起であつたと思う。しかも、この「第三世界論」は地理的「空間論」としてスタートしながら、アメリカ内部にも、旧ソ連内部にも第三世界的要素が孕まれていることに人々が気付き始め

社会史、文化史の中の「空間論」

——メモ的論評——

清水 多吉

前がき

「空間」あるいは「風景」にまつわる第二次大戦以前の理論については、既に別稿で論じておいた。あれらの言うならば古典的理論は、決着のつけられないまま戦後の思想に尾を引き、再三にわたってぶり返し論ぜられることになる。ところが、戦後も二〇数年もたつと、まったく異なる発想のもとに、新しい「空間論」あるいは「風景論」が登場してくることになる。その発想は、勿論、一様なものではない。それらの発想の母胎は、政治、経済、社会、文化、言語、テクノロジーの各分野にわたっており、問題意識もまた多様であつて、相互に噛み合う部分もないわけではないが、そのおおかたはスレ違いのままに終っている。次にそれらの発想を並べてみて、スレ違いでありながら、その底に流れるものの類似性を取り出し、論じてみようと思う。

① 「中心と周辺」論

この問題意識は、もともと政治権力のあり方に対する、あるいは文化的権威の遇し方に対する批判的視座からスタートしている。このことを

具体的にイメージ化するためには、西欧諸国における集権国家化の過程を思い浮べてみればいだろう。

例えば、フランスの場合、カペー王朝成立以来、パリが政治権力（あるいは文化的権威）の中心であり続けてきた。カペー、ヴァロア、ブルボンと中央集権化の道は平担ではなかったにせよ、地域政治あるいは地方文化を一樣に圧倒して、統一フランス政治、統一フランス文化を形成してきたかに思われる。しかし、統一化されるフランスに対する政治的文化的な異議申し立てが、中世以来、特にロアール河およびその支流以南の地域から頻発してきているのも事実である。イギリスの場合はもつと顕著であろう。もともとイングランドはグレート・ブリテンの中央部から南部にかけての一地方でしかない。歴代王家のなかで特にチューダー王朝期に集権化が計られ、シチュワート、ハノーヴァー王朝期にグレート・ブリテンの統一が成つたとはいえ、今なおスコットランド、ウェールズ（アイルランドは言わずもがな）が政治的統一体たるグレート・ブリテンから常に遠心分離の傾向にある。ドイツの場合、ベルリンが、もともとイギリスのロンドンやフランスのパリのような政治的文化的求心力を持つていなかったのは周知の通りであろう。中世から近代初頭にかけてのハプスブルク家のウィーンとて同じであつた。ひるがえつて日本の場合、江戸が政治権力の中心となつたのは十七世紀初頭であつたにせよ、文化の中心らしき様相を呈し始めたのは十八世紀後半に入つてからのことであり、しかも完全に文化の中心たりえたわけではない。

各先進諸国とも近代集権国家を形成してくるようになるや、当然にも一樣な法体系、一樣な経済圏、一樣な社会構成、一樣な文化形態をとつてくることになる。そこには、当然、地方、地域、民意とのズレも生れてくる。集権国家が政治権力と文化的権威とをもって、そのズレを均質化しようとするか、地方、地域、民意の方がそのズレを基にして、集権国家の正統性に異議を申し立て、その正統性の根柢に修正を迫ろうとす